

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520115

研究課題名（和文） ビザンティン聖者暦の分析による写本工房推定の試み

研究課題名（英文） Menologia in Byzantine Illuminated Lectionaries and Their Scriptoria

研究代表者

益田 朋幸（MASUDA TOMOYUKI）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70257236

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパ各地の図書館を調査し、11、12世紀を中心とするビザンティン・レクシヨナリー写本の聖者暦を収集して分析した。コンスタンティノポリスのオディゴン修道院、ストゥディオス修道院、ペトラ修道院の写本工房について、一定の活動実態が明らかになり、また複数の写本の注文者を確定することができた。明らかになったパトロンとしては、カルコプラティア聖母聖堂、同聖堂内聖ヤコブ礼拝堂、アギア・ディナミス聖堂等がある。

研究成果の概要（英文）：We collected the menologia which consists a later half of the Byzantine lectionaries, mainly from the 11<sup>th</sup> and 12<sup>th</sup> centuries, and analyzed the calendar of saints. Some characteristic activities of the monastic scriptoria, such as Hodegon, Studios, and Petra, can be pursued. We discovered that some lectionaries had been ordered by Panagia church in Chalkoprateia, St. James chapel in Chalkoprateia, and Agia Dynamis church.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：西洋美術史

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：コンスタンティノポリス、ビザンティン美術、レクシヨナリー、写本、西洋美術史、聖者暦、西洋史

## 1. 研究開始当初の背景

2004～2006年度の科研（基盤研究(C)「ビザンティン典礼用福音書写本挿絵の総合的研究」）における研究の結果、ビザンティン写本の中心をなすレクシヨナリー（典礼用福

音書抄本）の後半を占める聖者暦（Menologion/Synaxarion）の重要性が浮かび上がった。本課題では、レクシヨナリーの聖者暦を収集・分析することによって、写本の注文者（パトロン）と写本制作工房（スク

リプトリウム)の実態解明に努めることとする。

## 2. 研究の目的

西欧に先駆けて絵画の規範を築いたビザンティン世界であるが、現存する文献史料の少なさから、制作活動の実態はまったくと言っていいほど知られていない。本課題では、絵画のジャンルである写本を対象として、写本を制作した工房の実態を新しい視点から解き明かそうとするものである。

ビザンティン帝国でもっとも写本制作の盛んであった11、12世紀において、聖者暦の標準となるのは、アギア・ソフィア大聖堂のティピコンと、『コンスタンティノポリスのシナクサリオン』である。しかし両者の聖者暦はあまりに多数の聖者を収録するあまり、通常のレクシオナリーと比較してもその差が抽出できない。そこで本研究では、フランス国立図書館希語写本286番を基準とする。当写本は、11世紀中葉に、コンスタンティノポリスの総主教座で制作・使用されたことが、代表者の研究によって明らかになったものである(以下「総主教座本」と呼ぶ)。

この写本を「首都の中核において用いられていた標準的な聖者暦」と考え、それとの偏差を抽出することによって、各写本の制作地(コンスタンティノポリス/テサロニキ/聖山アトス/キプロス/小アジア等)を確定するとともに、工房の特徴的なカレンダーがあり得るかどうかを検討する。この作業は、レクシオナリー写本のリセンションを体系化することにもつながる。工房ごとに異なる暦が確定できた暁には、コロフォン(奥付)等の文字史料を持たない写本の制作地、工房を推定することも可能になるであろう。

## 3. 研究の方法

総主教座本は、1日に1~4人の聖人を祀る場合が多い。これを基準として各写本の聖者暦を比較する際に、以下の二つの方針を立てることとする。

(1) 総主教座本が祀る聖人の全員ではなく、その一部のみを祀る場合、また総主教座本が祀る聖人に加えてなお1~数人の聖人を祀る場合、これを「差」とは認めず、「一致した暦」と考える。

(2) 総主教座本が祀る聖人を、その翌日、または前日に祀っている場合は、それも「差」とは認めず、「一致した暦」と考える。

上記2方針は、中世写本転写の際にしばしば生じる誤記を「有意な差」と考えないためである。これに基づいて、収集済みの聖者暦を統計的に分析して、総主教座本との一致率を算出する。多くの場合に、90パーセント以上の一致率を見せ、これらの写本が首都コンスタンティノポリスで制作・使用されたこと

の確証となる。

総主教座本と一致しない写本については、コロフォンに記された制作地を手がかりにして、制作地の暦を復元する。キプロスは首都と著しく異なる暦を持ち、聖山アトス、小アジア(特にカルケドン等)は、首都と大きく異なることがわかる。

聖者暦の中に時折見られる encainia(聖堂献堂祭)の記載は重要である。多くの場合これによって、写本の注文主(パトロン)が確定できる。写本に施された挿絵の内容が、パトロンと関わるかも検討する。

## 4. 研究成果

まず本課題によって調査を行い、聖者暦のデータを収集し得た写本を以下に記す。

### \* ロンドン、British Library

Add.1993; 5153B; 40754; 11840; 28817; 28818; 36751

Burney 18; 22

Harley 5785

### \* オクスフォード、Bodleian Library

E.D. Clarke 10

MS. Auct. T. infra I

### \* アテネ、National Library

Cod.57; 61; 62; 63; 64; 66; 67; 69; 72; 74; 76; 85; 147; 164; 166; 167; 170; 179; 180; 187; 1905; 2114

### \* テサロニキ、Patriarchal Institute for Patristic Studies

Lavra A 54

Lavra A 62; A 86 ; A 92

Dionisiou 9; 30; 587

Iviron 1 ; 111m

Panteleimon 2

### \* パリ、Bibliothèque Nationale

Cod.gr.49; 64; 75; 78; 286

Cod.Suppl.gr. 27; 175; 1096; 1262

Cod.coislin 21; 31; 197

### \* パルマ、Biblioteca Palatina

Palat., MS. Cod.5

### \* ローマ、Biblioteca Apostolica Vaticana

Cod.Vat.gr.1156

### \* ヴェネツィア、Istituto Ellenico

Cod.gr.2

### \* 奈良、天理図書館 希語写本

### \* ニューヨーク、Pierpont Morgan Library

M639; M692

以上のデータは各写本について400項目以上(1年365日+)と膨大であるため、ここにすべてを記すことができない。今後何らかの形で、分析結果とともに公表する予定であるが、ここにはいくつかの点のみを記す。

パリ国立図書館 Cod.Paris.Suppl.gr.1096 は、首都コンスタンティノポリス、カルコプラティア(Chalkoprateia)の schole(一種

の学校)に属するグラマティコス (grammatikos、書記もしくは教師) ペトロスによって、司祭コンスタンティノスのために、1070年1月30日に完成された基準作例である。

ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館写本 Cod.M 639 は、アトス山ディオニシウ修道院 Cod.587 に次いで、豪華な挿絵を有する 11 世紀後半のレクショナリーである。ディオニシウ本の聖者暦には省略が多く、比較検討ができないため、モーガン本が挿絵入りレクショナリーの聖者暦としては最も重要なデータとなる。

総主教座本 (P)、モーガン本 (M)、カルコプラティア本 (C)、3 冊の挙げる聖人が完全に一致する日は、347 日中 281 日で、81,0 パーセントを占める。PM が一致する (C のみが異なる) のは 10 日で 2,9 パーセント、MC の一致は 32 日で 9,2 パーセント、PC の一致は 20 日で 5,8 パーセント、3 写本がすべて一致しないのは 4 日で 1,2 パーセントであった。月ごとに見た異同は、有意な差を認めない。

このように書くと、3 写本間には 2 割のヴァリエーションがあるように見えるが、事実はそのようではない。たとえば 3 写本とも異なる 10 月 28 日、11 月 12 日、1 月 10 日、6 月 9 日を確認しよう。10 月 28 日、P はテレンティオス - ネオニラ - 子どもたち、コスマス - ダミアノス、ステファノス - ペトロス - アンドレアスを挙げる。M はテレンティオス - ネオニラ - 子どもたちだけであるから、P に含まれることになる。C はテレンティオス - ネオニラ - 子どもたち、ステファノス - ペトロス - アンドレアスであるから、M を含み、P に含まれる。3 写本が一致しないと言っても、実情 3 写本は互いに含む/含まれるの関係にある。P のコスマス - ダミアノスのみ他の 2 写本に現れないが、これはアギア・ソフィアのティピコン (以下 AS) H 写本の 10 月 29 日に見られる。前後 1 日の違いは重大な差異と考えない、とする原則を適応するなら、10 月 28 日の 3 写本は問題なく一致しているのである。

11 月 12 日、P はヨアンニス・エレイモン、アルテモン、マルティニアノスを挙げる。M はヨアンニスとアルテモンだから P に含まれる。C はヨアンニスのみで、M にも P にも含まれる。ヨアンニス・エレイモンは、AS の H 写本では 11 月 11 日に祝われる。『コンスタンティノポリスのシナクサリオン』(以下 SCP) でも 11 月 12 日であるから、首都の大勢が 11 月 12 日と言ってよい。AS が、首都の典型的な典礼を記録しているわけではない好例である。アルテモンは AS の 11 月 9 日だから、やや離れている。マルティニアノスは AS では 10 月 23 日等で距離がありすぎる。理由は不明である。AS の 11 月 12 日は

マルティノスを記念しているので、これと混同されたものかも知れない。

1 月 10 日、P はテオファニア (1 月 6 日公現) のメテオルトン (後の祭り)、ニッサのグリゴリオス、エウストラティオス、マルキアノスである。M はメテオルトン、ニッサのグリゴリオス、ドメティアノス、マルキアノス、サバのヨアンニスで、P の 1 人がおらず、2 人を加える。C はメテオルトン、ニッサのグリゴリオス、ドメティアノス、エウストラティオス、マルキアノス、サバのヨアンニスで、P と M の双方を含む。つまり C の祭日を、P と M は選択して採用している。

6 月 9 日は見やすい。P はキリロス、フルトゥナトス。M はキリロス、イパティオス。C はキリロス、フルトゥナトス、イパティオス。すなわち C の 3 人のうち、P と M は 2 人を採用している。

煩瑣な検討はこれ以上行わないが、3 写本における 2 割の「不一致」のほとんどがこの類である。「前後 1 日」「含む/含まれる」の観点に立つなら、3 写本の暦はほぼ完全に同系統に属することがわかる。特殊な聖人が現れた際には、AS と SCP を参照すべきであり、多くの聖人がこの 2 系統によって解決されるが、しかし全体からみると AS、SCP ともに総主教座系統のカレンダーとはかなり異なっている。11 世紀のビザンティン帝国、首都コンスタンティノポリスの中心部で行われた教会暦としては、総主教座本系統が標準となることが実証された。

Encainia の問題についても、総主教座本が研究の端緒となる。総主教座本は以下の 11 日において、聖堂の献堂 encainia を祝っている。

- ・9 月 13 日 エルサレムのキリスト復活聖堂 (聖墳墓聖堂)
  - ・9 月 21 日 Petra の聖母聖堂
  - ・10 月 31 日 総主教座の聖母聖堂
  - ・11 月 4 日 Kyros の聖母聖堂
  - ・11 月 5 日 Sphorakiou の聖テオドロス聖堂
  - ・12 月 1 日 宮廷附属聖堂
  - ・12 月 18 日 Chalkoprateia の聖母聖堂
  - ・12 月 22 日 アギア・ソフィア大聖堂の開堂
  - ・12 月 23 日 アギア・ソフィア大聖堂の献堂
  - ・5 月 1 日 ネア・エクリシア
  - ・8 月 31 日 Chalkoprateia の聖母聖堂への聖母の腰帯安置と献堂
- これと同じ献堂祭日を有するのはヴェネツィア本のみである。ヴァチカン本、C 写本がともに祝うのはこのうちの 9 月 21 日、11 月 4 日、12 月 22・23 日、8 月 31 日で、C 写本はさらに 9 月 13 日、5 月 1 日の encainia も採用する。カルコプラティア本が 12 月 18

日カルコプラティアの聖母聖堂献堂を祝わないのは奇妙であるが、他の聖堂・修道院で使用するための注文であったかも知れない。

上述の献堂祭は、総主教座と近い関係にあった聖堂のものであるが、これ以外の単独の聖堂献堂祭を祀る写本が散見される。アテネ国立図書館 Cod.2363 の 12 月 16 日の条には、「開基にして最も聖なるコンスタンティノポリス総主教ニコラオスの思い出に」とあり、8 月 14 日には「この聖なる聖堂の献堂に」と記される。すなわちアテネ写本は総主教ニコラオスによって建立された聖堂 / 修道院のために制作された。ニコラオスなる名を持つ総主教は 4 人いるが、このうち 12 月 16 日という命日を有するのは総主教ニコラオス 2 世クリソベルギスである。2 世は小アジア、オリンポス山にスミラキア Smilakia なる修道院を創建したことが伝えられるが、献堂が 8 月 14 日かどうかは不明である。アテネ写本がスミラキア修道院のために制作されたものであるなら、8 月 14 日(聖母の眠りの前日)がエングニアであり、恐らく聖母に捧げられた聖堂であったことが推測できる。

パリ写本 Cod.Paris.Coislin gr.31 は、5 月 16 日に Agia Dynamis 聖堂の献堂を祝う。これは聖人ではなくキリストの特性である「力」に捧げられた特殊な聖堂なので、コンスタンティノポリスのアギア・ディナミス聖堂のための写本であることがわかる。

ナラティブなキリスト伝挿絵をもつアトス山イヴィロン修道院写本 Cod.1 は、10 月 23 日に Agios Iakobos の献堂を記す。これは挿絵の図像学的検討によって、コンスタンティノポリス Chalkoprateia 聖母聖堂内の聖ヤコブ礼拝堂に言及したものと知れる。

10 世紀のアトス山ラヴラ修道院写本 A86 は、アイコン的な挿絵から説話的な挿絵への過渡期の様相を留める重要な写本であるが、特殊な献堂祭を有することが、研究期間の最後に確認された。詳細な分析は今後行いたい、首都においてアギア・ソフィア大聖堂に次ぐ地位を有していた聖使徒聖堂と関係があると推測される。

写本工房については、最も特徴的な暦を抽出することができたのは、オディゴン Hodegon 修道院工房である。中期から後期にいたる複数のレクシヨナリーから、オディゴンの聖者暦を確定することができた。ストウディオス修道院工房に関しては、現存するレクシヨナリー写本の数が少なく、暦を復元するにはいたらなかったが、異なるジャンルの写本(レクシヨナリー、四福音書、詩篇、フィシオロゴス)が 11 世紀の後半に集中して制作されていることがわかった。異ジャンル間の図像学的な関係は今後検討すべき興味深い課題である。ペトラ修道院工房作のレクシヨナリーは複数確認できたが、総主教座と

近い関係にあった同修道院の暦は、総主教座のものとはほとんど差が認められなかった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1. 益田朋幸「書評 宮内ふじ乃『物語る絵トールのモーセ五書』」『本のひろば』625 (2010) 4 - 5 頁(査読無)
2. 益田朋幸「初期ビザンティンにおける『祈り』」『地中海研究所紀要』6 (2008) 55 - 57 頁(査読無)
3. 益田朋幸「レクシヨナリー写本の聖者暦」『地中海研究所紀要』6 (2008) 135 - 138 頁(査読無)
4. 益田朋幸・櫻井夕里子「コンスタンティノポリス総主教座のレクシヨナリー Cod.Paris.gr.286」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』22 (2008) 91 - 118 頁(査読有)

〔学会発表〕(計 1 件)

1. 益田朋幸「『最後の審判』図像の東西伝播」早稲田大学西洋中世ルネサンス研究所第 2 回研究会、2010 年 1 月。

〔図書〕(計 5 件)

1. 益田朋幸「初期キリスト教美術とビザンティン美術」朝倉世界地理講座 7 『地中海ヨーロッパ』(竹中克行・山辺規子・周藤芳幸編) 2010 年、73 - 75 頁。
2. 益田朋幸「ビザンティン聖堂におけるキリストの図像」三宅理一・羽生修二監修 『ルーマニアの中世修道院美術と建築 モルドヴァの世界遺産とその修復』西村書店、2009 年、138 - 149 頁。
3. 益田朋幸「ビザンティン聖堂壁画における『生と死』」林雅彦編 『「生と死」の東西文化史』方丈堂出版、2008 年、310 - 346 頁。
4. 益田朋幸「ウビシ修道院(グルジア)の装飾プログラム」林雅彦編 『「生と死」の東西文化史』方丈堂出版、2008 年、347 - 375 頁。
5. 益田朋幸「馬場恵二氏「キプロス島アシーヌウ聖母教会堂と『キリスト再臨図』」について」林雅彦編 『「生と死」の東西文化史』方丈堂出版、2008 年、376 - 385 頁。

〔その他〕

ホームページ等

ビザンティン聖堂データベース

<http://db2.littera.waseda.ac.jp/byzantine2/index.html>

WEB 版 『地中海研究所紀要』

[http://www.waseda.jp/prj-med\\_inst/bulletin.html](http://www.waseda.jp/prj-med_inst/bulletin.html)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

益田朋幸 ( MASUDA TOMOYUKI )  
早稲田大学・文学学術院・教授 )  
研究者番号 : 70257236

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

菅原裕文 ( SUGAWARA HIROHUMI )  
早稲田大学・文学学術院・助手  
研究者番号 : 40537875  
櫻井夕里子 ( SAKURAI YURIKO )  
早稲田大学・文学学術院・非常勤講師  
海老原梨江 ( EBIHARA RIE )  
早稲田大学・大学院文学研究科・博士後期  
課程  
杉浦実 ( SUGIURA MINORU )  
早稲田大学・大学院文学研究科・博士後期  
課程  
辻絵理子 ( TSUJI ERIKO )  
早稲田大学・大学院文学研究科・博士後期  
課程  
武田一文 ( TAKEDA KAZUHUMI )  
早稲田大学・大学院文学研究科・博士後期  
課程